

P3-27-3 卵巣チョコレート嚢胞摘出術後のAMH低下と妊娠予後に関する検討鳥取大¹, 鳥根県立大看護学部²平川絵莉子¹, 谷口文紀¹, 佐藤絵理¹, 東 幸弘¹, 数田結子¹, 出浦伊万里¹, 坂本靖子¹, 原田 省¹, 秦 幸吉²

【目的】卵巣チョコレート嚢胞に対する腹腔鏡下嚢胞摘出術では、術後の卵巣予備能低下が妊孕性に影響する。術前後の抗ミュラー管ホルモン（AMH）値と妊娠予後について後方視的に検討した。【方法】2011年から2013年3月までに当科にて腹腔鏡下嚢胞摘出術を行った患者のうち、40歳未満の56例を対象とした。卵巣・卵管周囲の癒着剝離、卵巣チョコレート嚢胞の摘出および腹膜病変の焼灼を基本術式とした。高齢、両側性、卵巣手術既往など、卵巣予備能低下が懸念される場合には嚢胞壁焼灼術を併用した。卵巣予備能は、チョコレート嚢胞（C群：n=24）とそれ以外の良性卵巣腫瘍（非チョコレート嚢胞；non-C群：n=16）を対象とし、嚢胞摘出術における術前後の血清AMH値により評価した。【成績】術後観察期間の中央値は18か月であり、累積妊娠率は40%であった。不妊患者28例中11例で妊娠が成立し、5例は自然妊娠、6例はARTによる妊娠であった。術前に不妊の訴えがなかった12例のうち、5例が自然妊娠した。C群では、non-C群に比して術前AMH値が低く（2.4 vs 4.6 ng/ml）、35歳以上の症例では特に低値であった。AMH値の低下した割合は、術後6か月（63 vs 24%）および1年（46 vs 21%）でC群で大きかった。C群においては、術後1年時にAMH値の回復がみられた症例は35歳以上で少なかった。【結論】卵巣チョコレート嚢胞に対する腹腔鏡下嚢胞摘出術は有用な術式であるが、卵巣予備能低下を防ぐための対応が必要であると考えられた。

P3-27-4 AMHからみた卵巣チョコレート嚢胞の治療戦略

産婦人科クリニックさくら

桜井明弘, 相澤知美, 杉山真理子, 桜井加那子

【目的】卵巣チョコレート嚢胞は大きな不妊因子の一つであり、付属器周囲癒着や病側卵巣の機能低下、また妊娠中の合併症、そして月経痛、骨盤痛の原因となるため手術適応となることが少なくない。一方でチョコレート嚢胞核出術後に卵巣性卵巣機能低下を来す症例も多く経験する。卵巣予備機能を測る抗ミュラー管ホルモン（AMH）値から、卵巣チョコレート嚢胞核出術の影響を検討する。【方法】2010年2月から2014年8月まで、当院でAMHを測定した983名のうちホルモン検査と超音波検査を施行した934名からPCOS症例90名を除いた844名を対象とし、卵巣チョコレート嚢胞を有さないA群689名、卵巣チョコレート嚢胞を有し手術未施行のB群109名、卵巣チョコレート嚢胞術後C群45名に分類した。各群間の年代別AMH値を比較検討した。【成績】各群の平均年齢はそれぞれ37.2±4.08, 34.7±3.5, 36.3±3.4歳でB群が他群に比べ有意に低く、AMHはそれぞれ2.41±2.49, 2.60±2.07, 1.08±1.25とC群が他群に比べ有意に低かった。AMHは年齢により低下するため、各群を5歳毎に分けて年代別比較すると、30歳代前半でそれぞれ3.35±2.73, 2.71±2.26, 0.54±0.40, 30歳代後半でそれぞれ2.23±2.17, 2.00±1.50, 0.88±0.71と、30歳代ではC群がA, B群に比べ有意に低下していた。【結論】AMHは卵巣チョコレート嚢胞の存在で低下する傾向にあったが有意差はなかった。一方でチョコレート嚢胞術後の症例では、主たる生殖世代の30歳代でAMHが低下し、卵巣機能不全を来することが推察された。将来の挙児希望症例では積極的な手術適応を避ける、や不妊症例では手術適応の前に受精卵凍結を行うなど、治療戦略を見直すことも検討すべきである。

P3-27-5 腹腔鏡下子宮内膜症性嚢胞摘出術後の妊孕性についての検討

順天堂大

加藤紀子, 北出真理, 地主 誠, 黒田恵司, 熊切 順, 竹田 省

【目的】子宮内膜症性嚢胞摘出術の治療効果に対しては未だに見解が分かれ、術後の卵巣機能低下についての報告も散見される。子宮内膜症性嚢胞合併の挙児希望症例に対して、術後妊孕能と妊娠寄与因子について検討した。【方法】2009年1月～2013年12月の間に当院で腹腔鏡下子宮内膜症性嚢胞摘出術を施行した挙児希望症例の92例を対象とした。妊娠群（52例）と非妊娠群（40例）の2群に分類し、患者背景と手術所見を比較検討した。不妊治療の内訳は、2群間で有意差はなかった。【結果】術後妊娠率は52%であり、術後2年以内に妊娠している症例は47例（91%）であった。患者背景（年齢、術前不妊期間、CA125、BMI、内膜症手術の既往）による比較では、非妊娠群で年齢が有意に高く（妊娠群：32.9±3.2歳、非妊娠群：34.9±3.4歳）、術前不妊期間も有意に長かった（16.6±16.3か月、43.6±34.3か月）。また手術所見（卵巣嚢腫径、r-ASRM、付属器周囲癒着スコア、手術時間、出血量、タグラス窩開放術の有無）の比較では、非妊娠群で付属器周囲癒着スコアが有意に高かった（9.2±8.0, 13.4±7.9）。【結論】腹腔鏡下子宮内膜症性嚢胞摘出術により妊孕能は改善すると考えられたが、術前の不妊期間が長い程、また付属器周囲癒着スコアが高いほど妊娠率は低下する可能性が示唆された。